



## しゅうぶん 秋分の日に思うこと

2021年9月23日は秋分の日です。太陽が、春分の日のごとく反対側<sup>がわ</sup>に来る日です。夏が終わって冬へ向かう間のことといふこともできるでしょう。北欧などの緯度<sup>ほくおう いど</sup>の高い地方の国では、秋分からハロウィン(10月31日)の頃<sup>ころ</sup>に行われるお祭りは「秋の収穫<sup>しゅうかく</sup>」の祭りの要素<sup>ようそ</sup>があります。日本では、秋分の日<sup>ひがん</sup>は彼岸<sup>ひがん</sup>の中<sup>ちゆう</sup>日<sup>にち</sup>であり、国民<sup>こくみん</sup>の祝日<sup>しゅくじつ</sup>として学校や会社は休みになります。



でも春分の日や冬至に比べると地味な感じがします。それは、まだ夏の続き<sup>つづ</sup>のような感じがするからなのでしょう。9月はまだまだ暑い<sup>いんしやう</sup>といった印象<sup>いんしやう</sup>があります。

春分はまだそれほど暖<sup>あたた</sup>かくなく、秋分はまだまだ暑い<sup>あたた</sup>のはどのような理由<sup>いんしやう</sup>なのでしょう。それは、夏至<sup>げし</sup>の地球<sup>ちきゅう</sup>の大地<sup>だいち</sup>や大気<sup>たいき</sup>に「熱慣性<sup>ねつかんせい</sup>」という現象<sup>げんしやう</sup>が働<sup>はたら</sup>くからです。地球<sup>ちきゅう</sup>の大地<sup>だいち</sup>や海<sup>うみ</sup>のように大きなものほど温まりにくく冷えにくい<sup>せいしつ</sup>という性質<sup>せいしつ</sup>があります。これが熱慣性<sup>ねつかんせい</sup>です。夏<sup>あたた</sup>に温<sup>あたた</sup>まった大地<sup>だいち</sup>や大気<sup>たいき</sup>は急に冷えないので、秋分の日<sup>あきぶん</sup>はまだ暑い<sup>あたた</sup>ということになります。

もっと大きな惑星<sup>わくせい</sup>、例えば木星<sup>たつ</sup>の場合<sup>たつ</sup>、地軸<sup>ちじく</sup>があまり傾<sup>かたむ</sup>いていないこと(わずか3度しか傾<sup>かたむ</sup>いていません、地球<sup>ちきゅう</sup>は23.5度です)もあって、12年(木星<sup>しきゅう</sup>が太陽<sup>たいやう</sup>を1周<sup>しゅう</sup>する時間<sup>じかん</sup>=木星<sup>しきゅう</sup>での1年)間、気温<sup>きん</sup>は変わりません。木星<sup>しきゅう</sup>は大きいのでそれだけ熱慣性<sup>ねつかんせい</sup>も大きいということになります。

地球<sup>ちきゅう</sup>でも、中緯度<sup>ちゆうい</sup>の日本<sup>にっぽん</sup>のような地域<sup>ちいき</sup>では季節<sup>きせつ</sup>の変化<sup>へんか</sup>がはっきりしています。赤道<sup>せきだう</sup>はまさに常夏<sup>とこなつ</sup>です。北極<sup>きたきょく</sup>や南極<sup>みなきょく</sup>はいつも冬<sup>ふゆ</sup>です。秋分の日<sup>あきぶん</sup>には、ささやかな季節<sup>きせつ</sup>の移り変わり<sup>うつ</sup>を楽しみましょう。

2021年9月13日記 (解説員: 齊藤 美和<sup>さいとう みわ</sup>)